

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 5 月 18 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02738

研究課題名(和文)統計的手法を用いた現代・古代日本語文法研究

研究課題名(英文)A Study of Modern and Ancient Japanese Grammar Using Statistical Methods

研究代表者

岡崎 友子 (OKAZAKI, TOMOKO)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：10379216

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、複合辞(形式語)・接続表現(接続詞)について「日本語歴史コーパス(CHJ)」をはじめ、その他のコーパスを用い、用例を収集・統計処理し、さらに分析結果について文法及び統計を専門としてきた者が精査、議論することによって理論化をおこなった。

その結果、これまでに明らかではなかった、複合辞(形式語)や接続表現(指示詞を構成要素としている接続表現)の歴史的な用法と変化を明らかにすることができた。成果としては、中古(平安時代)における接続表現の資料による偏り、現代語の接続表現「ソレデ・ソシテ・ソレガ・ソレヲ・ソコデ」の用法と歴史的変化に関する予想、名詞「頃」の形式語化等を明らかとしている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

複合辞(形式語)と接続表現(接続詞)については、現代語の研究はかなり進んでいるが、未だその用法が明らかになっていないことも多い。さらに古代語は現代語に比べ調査・分析は進んでいないのが現状である。

そこで、本研究では近年開発された大規模コーパスを用いて調査・収集したデータを統計処理し、分析結果を分野の違う研究者同士の議論、先行研究を検証し取り入れる等により、それらの用法・歴史的変化を明らかとした。本研究の成果は、今後の複合辞・接続表現研究に対し、新しい知見を提供できるものであり、また、今後の言語研究の深化・活性化に役立ち、さらに日本国内外における国語・日本語教育に寄与すると予想される。

研究成果の概要(英文)：This study uses a corpus (Nihongo Rekishi corpus) to investigate and analyze compound words and conjunctions in Modern and Ancient Japanese, and also examines the results of previous studies. Then, theorizing was carried out through discussions between representatives and subcontractors.

The results reveal historical usage and changes in formalisms and conjunctions that were not previously apparent. In detail, the results of the study include the bias of Heian period subjunctive expressions based on materials, the prediction of usage and historical changes in the modern subjunctive "sorede, sosite, sorega, sorewo, sokode", and the formalization of the noun "koro".

研究分野：日本語学

キーワード：文法史研究 接続表現 複合辞 形式語 指示詞 統計処理

1. 研究開始当初の背景

現代・古代日本語の複合辞・接続表現(接続詞)研究は、優れた研究成果がこれまでも出ている。しかし、それらは各分野で限られた文法現象・時代・資料を対象としたものであり、未だ明らかになっていないことも多い。そこで本研究は、近年開発が進んでいる国立国語研究所の「日本語歴史コーパス(CHJ)」をはじめ、その他のコーパスを用い、用例を収集・統計処理し、さらに分析結果について文法及び統計を専門としてきた者が精査、議論することによって、より精密な理論化をおこなうこととした。

2. 研究の目的

これまでの複合辞・接続表現(接続詞)研究は、各分野の個別のアプローチにより、それぞれの研究がなされてきた。現代語では、主として作例を使った内省による研究、また内省の効かない古代語では、それらが用いられている場面を解釈し、その用法を明らかにしてきた。これについては、研究代表者も分担者もそのスタイルでこれまで研究を続け、一定の成果を得ている。しかし、複合辞・接続表現(接続詞)の本質的な機能を明らかにしていくためには、様々な研究分野・時代(歴史)の研究成果をふまえた上で、客観的なデータを用い、体系的に分析をおこなっていくべきであり、現代・古代語研究の両者とも内省や古典作品の解釈に、いわば頼る研究から離れる必要がある。

そこで、本研究は、大規模なデータ分析から複合辞・接続表現(接続詞)の機能を明らかにし、理論化することを目的とし、(1)大規模な調査(電子コーパスを用い現代・古代中央語の用例収集、その他、諸方言・外国語の用例収集等)と収集した用例に対し統計処理を施し分析する、(2)分析の結果を、これまで文法を研究してきた(分野が相違する)研究者が相互に議論する、という(1)(2)により、複合辞・接続表現(接続詞)の本質的機能の究明を目指した。

3. 研究の方法

本研究は、以下の形で進められた。

(1)担当者(岡崎と竹内は古代・現代語、堤は現代語)が用例を収集、解釈等を加えた後、文法的な振舞いを分析する。

(2)収集した用例に対し統計処理をおこない(担当者は小林)、そのデータから各自、分析をおこなう。

(3)年に2度の対面とメールによる打ち合わせ・議論をおこなう。対面の際には、各自の研究を発表する研究会・講習会を当研究グループ内で開催する。

(4)まとまった成果は学会における研究発表やワークショップで口頭発表し、他の専門家による意見も求める。その後、論文として学術書(紀要・論集等)で公刊する。

4. 研究成果

研究成果(論文)について、主たるものをまとめておく。なお、本研究の柱である(1)接続表現(接続詞)(2)複合辞(形式語)さらに接続表現を研究する際に研究の必要性が生まれた(3)指示詞に分けて述べる。

(1)接続表現(接続詞)の研究成果としては、小林雄一郎・岡崎友子(2017)「中古における接続表現の統計的分析 指示詞を構成要素とするものを中心に」(『国立国語研究所論集』13) 竹内史郎・岡崎友子(2018)「日本語接続詞の捉え方 ソレデ、ソシテ、ソレガ、ソレヲ、ソコデについて」(『国立国語研究所論集』14) 岡崎友子(2018)「指示詞+助詞」による文接続の一考察 現代語・中古語コーパスの対照から」(青木博史他編『日本語文法史

4』ひつじ書房)を公刊した。

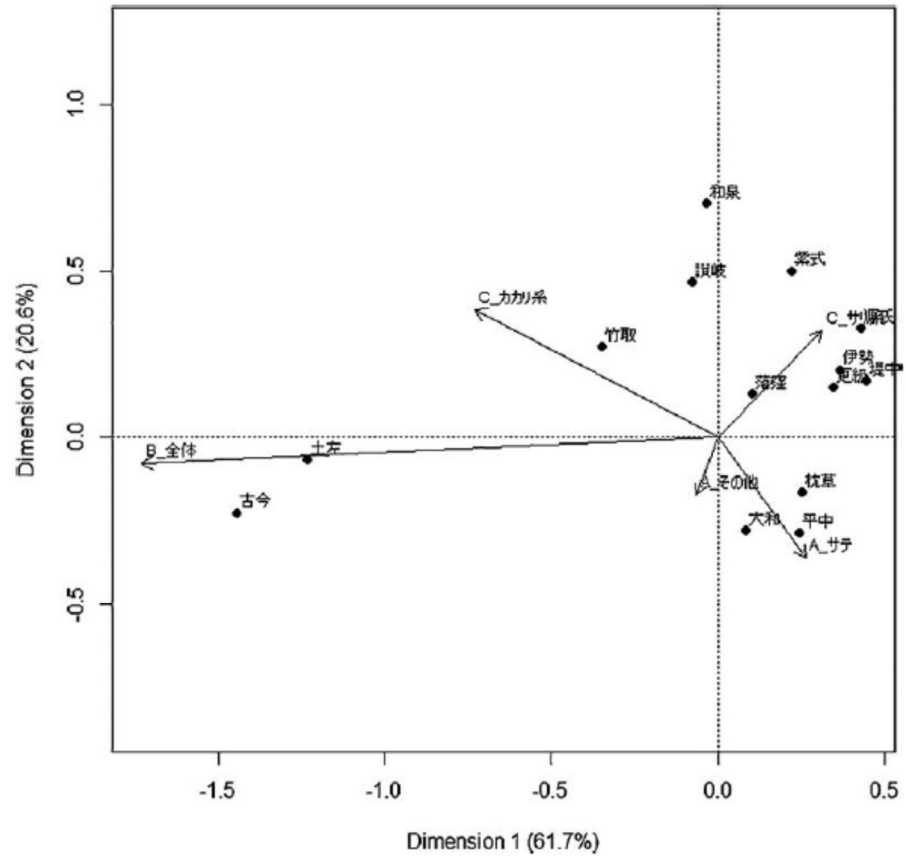


図1 対応分析による中古作品のグループ化

小林・岡崎(2017)は「日本語歴史コーパス」(平安時代編)によるデータと統計手法を活用することで、時代・ジャンル・書き手等の要因による接続表現の頻度の変異を分析したものであり(小林・岡崎(2017:図1(73)・図2(75))結果として紀貫之の筆による『土左日記』と『古今和歌集』(仮名序)の類似性、「サテ」の使用による歌物語の類似性、力カ系とサテ系の使用法に対する執筆年代の影響等を指摘する。

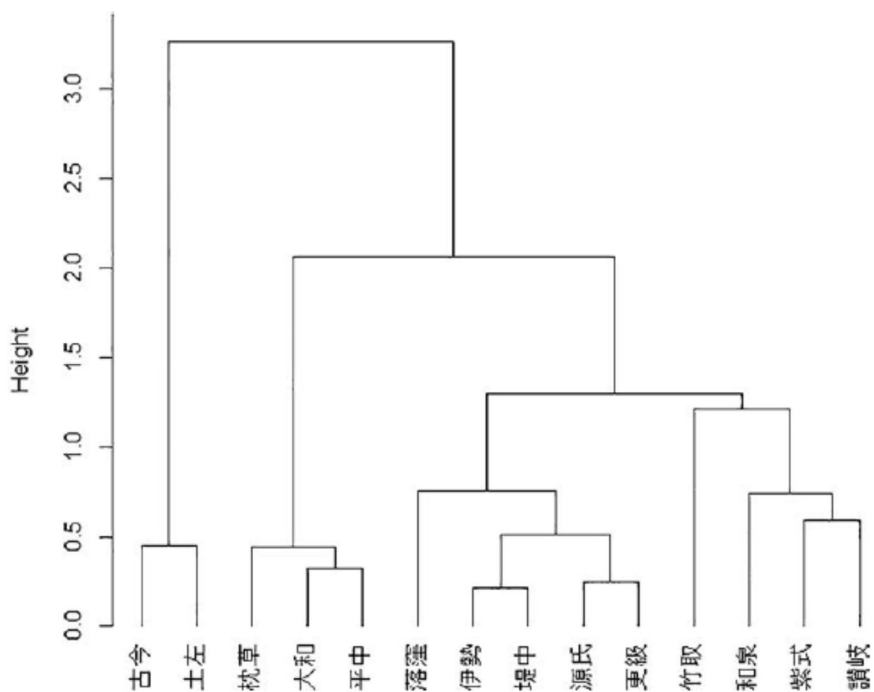


図2 階層型クラスター分析による中古作品のグループ化

次に、竹内・岡崎（2018）は現代語のソ系指示詞を含む接続表現について、ソの照応のあり方に着目し分析をおこない、理論化した。結果として、少なくとも3類の区別「直近複数の文（制限なし）が可能」「直近複数の文（状態性）が可能」「直近単一の文に限る」が認められること、さらに「モーダル助動詞の意味的スコープ」「疑問助詞の意味的スコープ」を利用し、文中での統語的な位置を指摘した。以上を、まとめた表を示す（竹内・岡崎（2018：252）表3）。

表3 ソレデ、ソシテ、ソレガ、ソレヲ、ソコデの照応と統語的な位置

| | Modal 内 | Modal 外かつ Interrogative 内 | Interrogative 外 |
|-----------------|---------|------------------------------|-----------------|
| 直近複数の文（制限なし）が可能 | ソレデ | ソレヲ | |
| 直近複数の文（状態性）が可能 | | ソレガ | ソコデ |
| 直近単一の文に限る | ソシテ | | |

岡崎（2018）は現代・中古語の「指示代名詞（ソレ・ソコ）＋助詞」による文接続のうち、どの組合せが接続表現として機能するのかを明らかにするため「現代語書き言葉均衡コーパス」「日本語歴史コーパス」を用いて全ての例を抽出、集計・比較することにより接続表現の絞り込みをおこない、さらに中古語の接続表現の用法（中古語では「ソレ＋ニ」「ソレ＋ヲ」「ソレ＋モ」が接続表現であり、意味関係としては逆接、添加、原因・理由、転換を表す）を指摘した。

（2）複合辞（形式語）の研究成果としては、岡崎友子（2018）「頃」の用法と歴史的变化 現代語・中古語を中心に」（藤田保幸他編『形式語研究の現在』和泉書院）を公刊した。

岡崎（2018）では現代・中古語「頃」の意味用法について、「日本語歴史コーパス」「現代語書き言葉均衡コーパス」を用い「頃」の前接語を比較、意味用法の分析をおこない、その結果、現代語「頃」は形式名詞・接続助詞・接尾辞、中古（上代）語は実質的な意味をもつ名詞と形式名詞として働いていることを指摘した。さらに、中世・近世語の「頃」を同様に調査・分析し、その歴史的变化の予想（「頃」は中世・近世では接続助詞の例はなく、接尾辞の機能も未だ獲得していないと予想される。中世・近世以降にこれらの機能を漸次、獲得したと考えられるが、調査範囲が十分ではないため、今後、さらに調査が必要である）をおこなった。

（3）（1）のターゲットする接続表現が「ソレ・ソコ＋デ・ガ・ヲ」等の指示詞を構成要素とするものであり、研究の過程で、指示詞（特に指示代名詞）についても分析が必要であると判断し、期間内に指示詞の研究もおこなった。

研究成果としては、岡崎友子（2018）「現代語・中古語の観念用法「アノ」「カノ」」、堤良一（2018）「直接経験が必要ない記憶指示のアノ」（ともに、岡崎友子他編『バリエーションの中の日本語史』くろしお出版）、岡崎友子（2020）「現代日本語の指示詞コソアの指示領域」（『文学論叢』73）を公刊した。

岡崎（2018）及び堤（2018）は、先行研究において、指示対象について直接的体験的知識（経験）が話し手・聞き手ともに必須であるとされてきた記憶指示のア系（古代語ではカ系）指示詞について、調査・分析したものであり、岡崎（2018）は現代共通語と中古語、堤（2018）は現代語の方言について調査・分析している。その結果、アには直接的体験的知識が必要だとされるが、そうでない指示もあることを明らかにしている。

次に、岡崎（2020）は関東出身・在中者の若者（大学生）を調査対象とし、現場調査をおこない（調査配置は岡崎（2020：138）図2、指示対象物と調査文も以下に示す）個人・指示対象

(指示詞)の違いによる指示領域の差異を観察・分析している。

結果として、全体的な傾向は、 コは被験者から 1-2m、 ソ 1 (中距離指示)は被験者から 3-4m、 調査者と被験者間のアは被験者から 6m、 ソ 2 (聞き手領域指示)は【条件 1 (位置 1)】(調査者と被験者が 11m 離れて向かい合う) 調査者から 2m、【条件 2 (位置 2)】(調査者と被験者は 5.5m 離れて向かい合う) 調査者の前 1.5・後 0.5-1.5m である。さらに、個人的な傾向としては「調査者と被験者が 11m 離れて向かい合う【条件 1 (位置 1)】で同じ 6 人が全問「コ→ソ 1 (中距離指示)→ア→ソ 2 (聞き手領域指示)」と回答したのに対して、2 名は全問「コ→ソ」と回答した」といった個人差が見られたとする。その他、場所を指示する指示詞(ソコ)には、中距離指示が現れやすい等の指示詞による傾向、さらに「相手に対象の位置を知らせる(注意する)/相手から聞かれた対象の位置を答える」という違いと、指示対象が「好ましくない対象/好ましい対象」という違いが指示領域に影響する可能性を指摘している。

岡崎 (2020) の調査方法を、以下に記しておく。



指示対象物(3 パターン)と調査文

【第 1 問】【第 3 問】は調査者 (A) が指示対象の位置を被験者 (B) に問かける形 (「コノ・ソノ・アノ (人)」で回答) 【第 2 問】は被験者 (B) から調査者 (A) に話しかけ、被験者 (B) が指示対象の位置を教える形 (「ココ・ソコ・アソコ」で回答) となっている。

【第 1 問】対象物は「芸能人の写真(上半身 A3)」

調査者 (A) 「(①～⑩の芸能人の名前) は、どの人ですか？」
被験者 (B) 「(この・その・あの) 人です。」

【第 2 問】対象物は「害虫等の好ましくないものの絵(A 3)」

被験者 (B) 「<調査者の名前>さん！ (①～⑩の害虫等の名前) がいます！」

調査者 (A) 「えっ！どこですか？」

被験者 (B) 「(ここ・そこ・あそこ) です！」

【第 3 問】対象物は「名札(A4)を掲げた人」

調査者 (A) 「(①～⑩の人) はどの人ですか？」

被験者 (B) 「(この・その・あの) 人です。」

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

| | |
|--|---------------------------------|
| 1. 著者名 岡崎友子 | 4. 巻 73 |
| 2. 論文標題 現代日本語の指示詞コソアの指示領域 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 文学論藻 | 6. 最初と最後の頁 140 (1) -124 (17) |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 岡崎友子 | 4. 巻 38-4 |
| 2. 論文標題 指示詞からみる文法史 内省の効かない古代語を研究対象とする | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 日本語学 | 6. 最初と最後の頁 12-21 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 小林雄一郎・岡崎友子 | 4. 巻 13 |
| 2. 論文標題 中古における接続表現の統計的分析 指示詞を構成要素とするものを中心に | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 国立国語研究所論集 | 6. 最初と最後の頁 65-77 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 竹内史郎・岡崎友子 | 4. 巻 14 |
| 2. 論文標題 日本語接続詞の捉え方 ソレデ、ソシテ、ソレガ、ソレヲ、ソコデについて | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 国立国語研究所論集 | 6. 最初と最後の頁 241-254 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

| |
|--------------------------|
| 1. 発表者名 岡崎友子 |
| 2. 発表標題 現代語コソアの指示について |
| 3. 学会等名 日本語文法学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名 岡崎友子 |
| 2. 発表標題 CHJを用いた感動詞の研究 |
| 3. 学会等名 日本語学会2018年度春季大会ワークショップ |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 岡崎友子 |
| 2. 発表標題 「指示表現 + 助詞」による文接続の一考察 |
| 3. 学会等名 国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」中古・中世班、語彙・意味班合同研究会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 岡崎友子 |
| 2. 発表標題 『日本語歴史コーパス』を利用した中古の感動詞研究 |
| 3. 学会等名 国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」文体・資料性班、語彙・意味班合同研究会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 岡崎友子 |
| 2. 発表標題 日本語指示詞における地理的・歴史の変異の研究 |
| 3. 学会等名 シンポジウム「バリエーションの中での日本語史」（招待講演） |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 小林雄一郎 |
| 2. 発表標題 言語研究における統計の活用 |
| 3. 学会等名 共同プロジェクト・機関拠点型基幹研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」（小木曾智信）共催、研究発表会 |
| 4. 発表年 2016年 |

〔図書〕 計10件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 岡崎友子 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 ひつじ書房 | 5. 総ページ数 298 |
| 3. 書名 「指示詞+助詞」による文接続の一考察 現代語・中古語コーパスの対照から」、青木博史・小柳智一・吉田永弘編『日本語文法史4』 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 岡崎友子 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 くろしお出版 | 5. 総ページ数 297 |
| 3. 書名 「現代語・中古語の観念用法「アノ」「カノ）」、岡崎友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太編『バリエーションの中の日本語史』 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 岡崎友子 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 和泉書院 | 5. 総ページ数 593 |
| 3. 書名 「「頃」の用法と歴史的変化 現代語・中古語を中心に」、藤田保幸・山崎誠編『形式語研究の現在』 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 竹内史郎 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 くろしお出版 | 5. 総ページ数 297 |
| 3. 書名 「日本語諸方言における被動者項を指向するパーフェクトの他動詞文の多様性」、岡崎友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太編『バリエーションの中の日本語史』 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 堤良一 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 くろしお出版 | 5. 総ページ数 297 |
| 3. 書名 「直接経験が必要ない記憶指示のアノ」、岡崎友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太編『バリエーションの中の日本語史』 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|--------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 小林 雄一郎 (KOBAYASHI Yuichiro) (00725666) | 日本大学・生産工学部・助教 (32665) | |
| 研究分担者 | 竹内 史郎 (TAKEUCHI Shiro) (70455947) | 成城大学・文芸学部・准教授 (32630) | |

